

新たに見つかった奈良市の城郭

～北村城西出城（仮称）～

寺 田 碧*

A Recently Unearthed Castle in Nara City
Kitamura Castle West Outer Bailey

Aoi TERADA

論 旨

「北村城西出城」とは令和4年（2022）4月8日に新発見された奈良市内の城郭である。本稿ではその新発見の城郭について縄張図と文献から調査した。北村城西出城は位置関係から北村城との関係が深いことが伺え、その防衛機構から東山内の城に共通している点を導き出した。また、文献調査から箕川氏との関係を見出した。そこから、この城は北村城、もしくは箕川氏と関係する城郭で、国境警備の役割があるのではないかと結論付けた。

キーワード：北村城西出城、北村城、箕川氏、山内型城郭

I はじめに

奈良県奈良市北村町の北部の丘陵上には喜多氏の北村城がある。この北村城の西の尾根上に令和4年（2022）4月8日に城郭が新たに発見された。この城郭は発見者が「北村城西出城（仮称）」と命名し、X（旧：Twitter）に当城のことを投稿した。本稿では、一般的な縄張調査と文献史料の調査からその新発見の城郭について寺田の考察を交えて紹介する。

II 発見の経緯

北村城西出城（以下、仮称は省く）は令和4年（2022）4月8日に遠藤千尋氏によって発見された城郭である。この日、遠藤氏は『東里村史』に記述される北村城の出城の痕跡を見出すため北村城の西に延びる尾根の上を歩いていた。そこで堀状の窪地を見つけた遠藤氏はこれが砦跡ではないかと推測し、後にGPSのログから簡易的な平面図を作成した。その後、寺田が同年10月

3日にその遺構を確認し、縄張調査を行った(注1)。

なお、当城の遺構は上述した『東里村史』の記述と一致せず、『奈良市史』『日本城郭大系』の北村城の項目の記述とも一致しない。この遺構は事実上の新発見の城郭だろう。

Ⅲ 立地と縄張

北村城西出城の縄張は図1、その立地は図2に示した通りである。当城は北村城のある場所から西に延びる尾根の上に位置している。この地点は北村城、北村城山城と共に北村集落のある谷を監視できる場所である。また、北村城とは尾根続きの場所にあるため、北村城方面から山道が伸びており、当城の北を通過して現在の奈良県と京都府との県境の道に出る。こうした立地上、北村城と北村城西出城には関係があったらうことは想像できよう。

城は東西に延びる尾根の南北に長いピークに作られており、北東部には堀切を穿っている。この堀切の北東には縦堀状の掘り込みがある。この掘り込みは図の北側で北村城に繋がる道と接続しているため、これは古い道の跡であろう。また、城全体を囲うように上幅5m、深さ4.5mの箱堀状の横堀が巡る。横堀は全体的に外側に土塁が伴うが、東側の一部には土塁はなく、帯曲輪のようになる。また、南側のDとCとの2ヶ所で一度土塁が途切れている。この横堀は北東部の堀切と接続しており、城全体が堀切と横堀で囲われる。なお、城郭の遺構ではないと判断したため、図化していないが、城の東から南にかけて古い道の跡らしきものを確認している。

主要な①の曲輪と副次的な②の曲輪から構成される。①の曲輪は東西約25m、南北約45mの南北に長い楕円形の曲輪である。曲輪内には浅い溝が西から南に走っている。また、溝が途切れた後でも溝の北の肩はそのまま東に延びて、①の曲輪を上下2段に分けている。なお、①の曲輪の内部は藪が繁茂しており、一部遺構の見逃しがある可能性がある。①の曲輪は規模から考えて主郭に該当しよう。この①の曲輪の南には虎口状のAがある。そのため、①の曲輪と②の曲輪との行き来はこのAを介して行われたのだろう。一方、①の曲輪の北にはBの虎口状空間が存在する。Bは平入虎口であり、東に檜台状の土壇が設けられている。この外には土橋が掛かり北村城と繋がる山道と接続している。②の曲輪は①の曲輪の南に位置しており、①の曲輪とは虎口状のAで繋がっている。②の曲輪は東西約20m、南北約10mの小曲輪である。

②の曲輪は外側の土塁の切れ目Dの真北に位置しており、Dから侵入して、②の曲輪を経由して①の曲輪に至るようなルートが想定できると考える。しかしながら、このルートであると、①の曲輪まで一直線で侵入されてしまうだろう。また、②の曲輪は城内の最南端に位置しており、今でこそ山林や藪で何も見えないが、仮に草木を払えば安郷川の谷を見通せよう。そのため、②の曲輪は物見の曲輪である可能性もあるだろう。

Ⅳ 立地などから推定される来歴

北村城は室町時代の喜多氏の城郭と考えられており、南麓には北村の集落が広がっている。その構造は山内型城郭の典型例とされる（奈良県2020、平井1980など）。ここではこの北村城との位置から考察できる北村城西出城の来歴について記す。

北村集落は東西に長く、北村城は北村集落の北東に位置している。一方、北村城西出城は北村集落の北西に位置しており、北村城と互いに北村集落を見下ろす位置にある。さらに双方同じ丘陵上にあるため、互いに連絡しやすく、北村城とは「本城-支城」の関係であったと考えられよう。当城の東側は横堀の外側の土塁がなくなり、帯曲輪状になっている部分がある。この帯曲輪状の部分の東の斜面は現在、急な斜面な上に藪であるため、斜面を降りることはできない。しかし、地図で見た限り、この東の斜面を降りると北村集落の北西部に至る。

このような集落方面に向けて横堀の外の土塁がなくなって帯曲輪状の空間になるのは山内型城郭の特徴と類似している。他にも横堀が城郭の周囲を囲う点や基本におおむね単郭のような構造も山内型城郭の特徴と類似している。この山内型城郭とは、大和国の東山内地域に見られる城郭で、集落の近くにある丘陵上にある。その丘陵上に集落の方向以外を土塁と空堀で囲ったおおむね方形単郭の居館的要素を含む城郭のことである（平井1980、奈良市史編集審議会1994）。当城は曲輪が方形ではない、土塁が盛られていないなどの点は異なるため、正確には山内型城郭とは言えないが、当城は部分的に山内型城郭の特徴を備えた城郭と言える。こうした山内型城郭の特徴を部分的に引き継いだ城であるため、少なくとも先進的な築城技術のない者の築城と考えられる。

また、北村は中世に箕川領だったという伝承がある（奈良県2020）。そのため、当城は箕川氏の関与が考えられる。これに関連するものに『多聞院日記』天文十二年四月十六日条には次のようにある。

【史料1】（注2）

今曉從筒井箕川被取懸了、近般世上口遊ニハ万歳片岡などへかとのミ沙汰ニテ、箕川へノ事一向無沙汰之處ニ、順昭自身被出張、彼在所三ツ城アリ、今日二ノ城落居了、箕川方究竟衆廿余人打死々、箕川藤八親子（子一人死ス）、四人（余ハシナス）・ワツカ北五郎ヲ始トソ、究竟之衆打死云々、本城未無退城、今曉テハ彼方ニハ一向無覺悟云々、筒井衆手負數限なし、中坊ホリモ打死了、今朝ヨリハ引モチキラス手負ヲ離ケ了、寄手ハ六千余騎、城中ニハ僅五六十騎也云々、弓取テノ名譽不可過、箕川ニハ（マヽ）誠ニ可嘲張良ヲモ武士哉、定而多勢ニ無勢ナル上、一陳破テハ殘党不全金言アレハ、今夕ハ可退城歟、雖然彼城墾ヲ以六千余騎取廻野陳之間、更以可落之様無之云々

【史料1】からわかるように「彼在所三ツ城アリ」と記されており、須川氏の城は3つあるとされる。この3つの城に当城が含まれるか不明だが、須川城とは別に城が3つあると考えるのなら、北村には北村城、北村城山城、当城の3城あり、記述と一致する。そのため、この天文12年

の記事の関係性も考慮するべきである。また、当城は山城国と大和国との国境から100mも満たない場所にある。このため、国境を抑える城郭だった可能性がある。

以上2点より、当城は北村城の喜多氏、もしくは須川氏が関与した城郭ではないかと考えた。

V まとめ

北村城西出城は令和4年(2022)に新たに発見された城郭である。その構造、立地、文献史料から古い築城技術のみを有する者によって築かれた城で、喜多氏、もしくは簀川氏の関与があり、その役割は国境警備の可能性がある。中世の北村地域に関する文献史料は少なく、その歴史は不明な点が多い。そこでこの北村城西出城の発見が今後、北村地域の歴史を知るための手立てになるはずである。

註

- 1) 本文の経緯は遠藤氏とのダイレクトメッセージでのやり取りから再構成したものである。なお、遠藤氏はインターネットサイト『やまっぷ』(<https://yamap.com/activities/16620127>)にて当時の足跡の書き込みを投稿している。また、遠藤氏は令和4年(2022)4月8日に当城の発見した後、当城のことをX(旧:Twitter)に投稿している(<https://twitter.com/mirokunomichi/status/1513141709273632771>)。その投稿を見て寺田が後にDMにて連絡を取り合い、現地調査をする運びとなった。また、本報告にあたり第一発見者の遠藤氏の同意は得ている。
- 2) 『多聞院日記』天文12年(1543)4月16日条(辻善之助編『多聞院日記 第一巻』<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/2973951/1/168>、国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧)

参考文献

- 加茂町史編さん委員会編 1988『加茂町史 第一巻 古代・中世編』加茂町
東里村史編集委員会1957『東里村史』東里村史編集委員会
奈良県2020『奈良県中近世城館跡調査報告書 第一分冊』奈良県
奈良県2021『奈良県中近世城館跡調査報告書 第二分冊』奈良県
奈良市史編集審議会1994『奈良市史 通史二』奈良市
平井聖編1980『日本城郭大系 第10巻 三重・奈良・和歌山』新人物往来社

Abstract

A Recently Unearthed Castle in Nara City
Kitamura Castle West Outer Bailey

Aoi TERADA

“Kitamurajonishideshiro Castle (Kitamura Castle West Outer Bailey)” is a newly discovered castle within Nara City, which was found on April 8, 2022, during the Reiwa 4 era. In this article, we have conducted an investigation of this newly discovered castle through site mapping and literature analysis. It is apparent that Kitamurajonishideshiro Castle Bailey has a significant connection with Kitamura Castle based on its geographical proximity, and we have inferred shared defensive mechanisms with castles located within the Higashisannai region. Furthermore, our literature research has revealed associations with the Sugawa clan. From these findings, we conclude that this castle is likely related to Kitamura clan and the Sugawa clan, possibly serving a role in border defense.

Key words : Kitamuranishideshiro Castle, Kitamura Castle West Outer Bailey, Kitamura Castle, Sugawa Castle, Sannai-type castles.

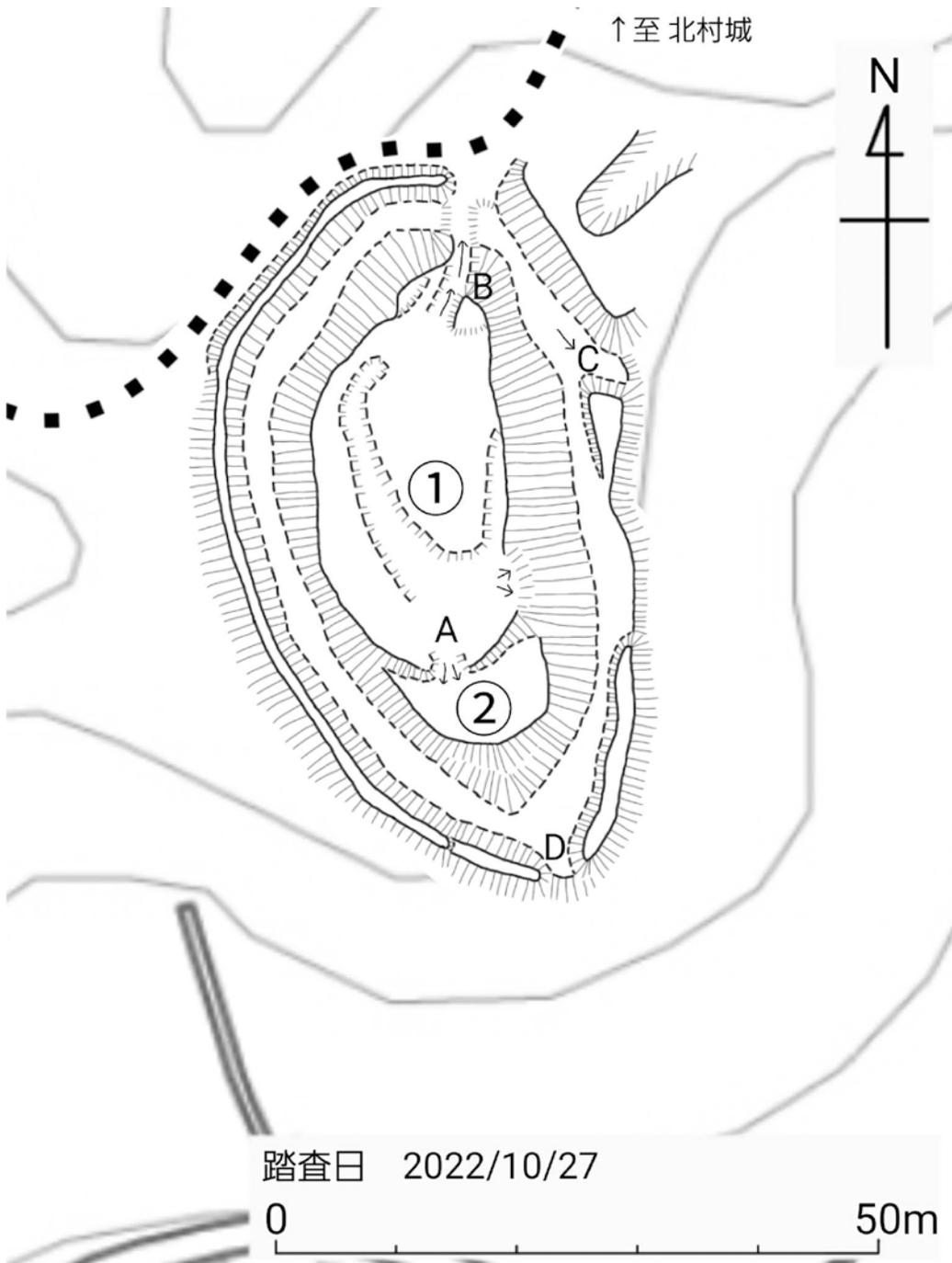


図1 縄張図

出典：国土地理院ウェブサイト (<https://www.gsi.go.jp/>) (電子国土Web 標準地図 (<https://maps.gsi.go.jp/#5/36.104611/140.084556/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>) をもとに寺田碧作成)

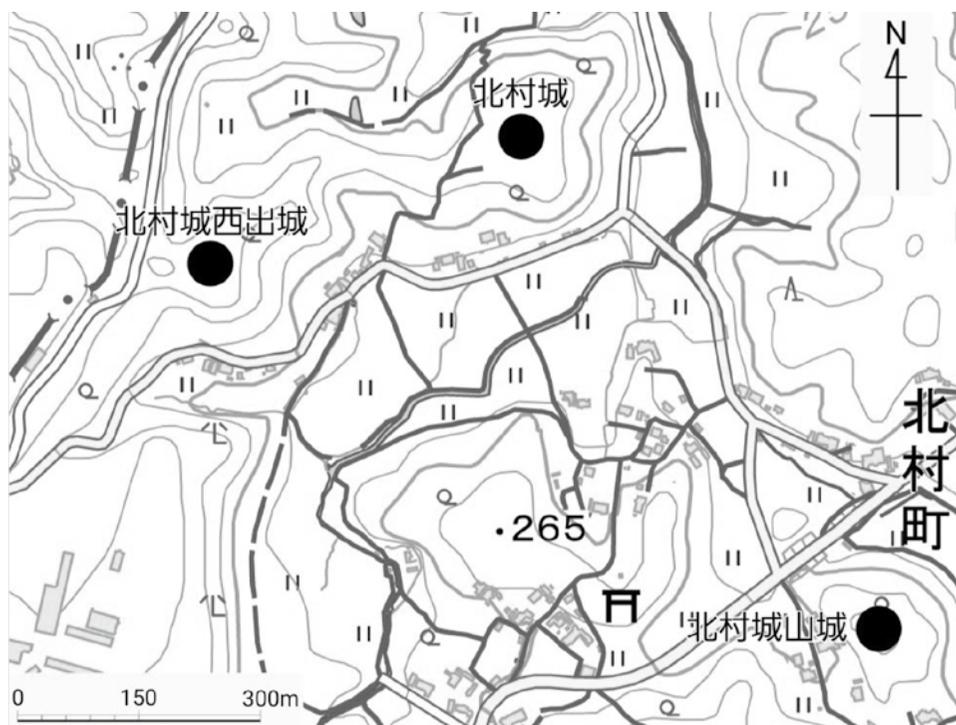


図2 北村城西出城の位置とその周辺

出典：国土地理院ウェブサイト (<https://www.gsi.go.jp/>) (電子国土Web 標準地図 (<https://maps.gsi.go.jp/#5/36.104611/140.084556/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>) をもとに寺田碧作成)



写真1 Bの虎口

(撮影者：寺田碧、撮影日時：令和4年(2022)10月27日12:37)
外側(北の道側)から城内側(南)へ撮影。



写真2 北西部の横堀

(撮影者：寺田碧、撮影日時：令和4年(2022)10月27日15:37)

外側(北の道側)から南方面へ撮影。



写真3 北東部の堀切

(撮影者：寺田碧、撮影日時：令和4年(2022)10月3日14:29)

図XのCの辺りから北方面(北の道側)へ撮影。



写真4 ①の曲輪

(撮影者：寺田碧、撮影日時：令和4年（2022）10月3日14：45)

①の曲輪南西部から北西方面へ向かって撮影。



写真5 ②の曲輪

(撮影者：寺田碧、撮影日時：令和4年（2022）10月27日15：39)

②の曲輪東部から西方面へ撮影。

